九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 「state類事態の時間構造」再考 : 英語”know”, 日本語「知る」, スペイン語”saber”の対照研究(上)

山村, ひろみ
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1500410

出版情報：言語文化論究. 34, pp.53-66, 2015-03-20. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

# 「state 類事態の時間構造」再考

## ――英語 “know”, 日本語「知る」, スペイン語 “saber” の対照研究――(上)*

山　村　ひろみ

### 1．はじめに

本稿は、英語 “know”、日本語「知る」、スペイン語 “saber” のテンス・アスペクトの振る舞いを基に、語彙アスペクトの中でも、特に、state と呼ばれる類の時間構造について論じるものである。

周知のように、各事態[1]にはそれ独自の時間構造、いわゆる語彙アスペクトがあると言われている。その種類や数は研究者によって異なっているが、もっとも代表的な Vendler（1967）によれば、英語には、次のような state 類、activity 類、accomplishment 類、achievement 類 の 4 種類があるとされている。

（1）　state 類：know, love, recognize
　　activity 類 : run, push a cart
　　accomplishment 類 : draw a circle, run a mile
　　achievement 類 : win the race, reach the top　　Vendler（1967）

Vendler（1967）の分類は英語を対象に行われたものであるが、先行研究の中には、次の Smith（1991）のように、語彙アスペクトを言語間の違いを説明する普遍文法のパラメータとして捉えているものもある。

“I propose here a Universal Grammar account of aspect which will provide the basis for parametric treatment. In this account aspect is a parameter of language difference.” (Smith 1991: 22)

上によれば、アスペクトは普遍文法の一パラメータとして各言語の相違を表すものということになるが、Smith（1991）はこのアスペクトを situation types と viewpoints の二つの基本的構成要素からなるものとしている[2]。このうち situaton types と呼ばれる基本的構成要素はいわゆる語彙アスペクトに相当することから、結局、Smith（1991）は語彙アスペクトも普遍文法のパラメータになると考えていることになる。

しかし、このように語彙アスペクトについて普遍性を唱えることに妥当性はあるのだろうか。確かに、どの言語にもある共通の時間構造を持つ事態群があり、それらをある一定の類として区分することはできようが、その類のあり方がすべての言語において共通かと言えば、その点については疑問がある。例えば、以下の英語とスペイン語の関係を見られたい。

（2） “*Tener*: the preterite often means ‘to receive’/‘to get’, the imperfect means ‘had’ in the sense of ‘was in my possesion’:
Tuve la impresión de que… I got the impression that...
Tenía la impresión de que... I had the impression that...
Tuve una carta I got/received a letter（Butt & Benjamin 1994[2]:213）

上の例は英語を母語とするスペイン語学習者に対する参考書の中で、スペイン語が持つ２つの過去形、pretérito perfecto simple（以下、ps.）と pretérito imperfecto（以下、imp.）の違いを説明するために提示されたものである。この例によれば、通常、state 類に分類される英語の “have” を含む事態（have the impression that…, have a letter）の過去形はスペイン語の imp.（*tenía*）に対応しても ps.（*tuve*）には対応しない。また、これをスペイン語の側から見れば、スペイン語で通常 state 類に分類される “tener” を含む事態（tener la impresión de que…, tener una carta）の ps. による表出（*tuve la impresión de que…, tuve una carta*）は、英語では state 類とは異なる語彙アスペクト、すなわち、achievement 類に属す “get/receive” を含む事態（*I got the impression that…, I got/received a letter*）に対応するということになる。しかし、ここで特に注目すべきは、スペイン語では同一事態の文法アスペクトの違い（つまり、ps. による表出と imp. による表出の違い）が、英語では異なる語彙アスペクトに属す２つの異なる事態によって表されるという事実である。なぜならば、それは英語を例にして語られることの多い語彙アスペクトの分類の有効性、とりわけ、各類に分類された事態のリストという観点から見たその枠組みの有効性、また、語彙アスペクトと文法アスペクトとの関係を再検討させるに足るものだからである[3]。

本稿は、以上のことを踏まえ、次のことを明らかにする。まず、語彙アスペクトの分類の普遍性を検証する第一歩として、先行研究の中でもこれまであまり議論されることのなかった state 類事態の時間構造を取り上げる。具体的には、state 類の典型とされてきた英語の “know” とそれに対応する日本語の「知る」およびスペイン語の “saber” の振る舞いを比較対照し、「知る」と “saber” の時間構造は英語の “know” のそれとは異なることを示す。次に、“know” の時間構造とは異なるという点では共通する「知る」と “saber” の間にも相違点があることを明らかにし、さらに、各言語の語彙アスペクトを決定する際には看過できない諸要因があることを指摘する[4]。

## ２．先行研究における state 類事態の解釈

本節では、まず、語彙アスペクトを論じた先行研究において state 類に分類された事態がどのように解釈されてきたかを見ていく。

語彙アスペクトという用語は使わなかったものの、ある事態には独自の時間構造[5]があることを主張した Vendler（1967）は、各類の時間構造の違いは “be+~ing” という迂言形式による表出が可能か否か、また、どのような時の副詞句と共起可能か、等によって確認できるとした。以下を参照されたい。

（3） What are you doing ? —— I am running.（activity 類）
I am writing a letter.（accomplishment 類）
*I am loving.（state 類）
*I am reaching the top.（achievement 類）

(4) a. At what time did you reach the top ? At noon sharp. (achievement 類)
b. For how long did you love her ? For three years. (state 類)

Vendler (1967)

Vendler (1967) によれば、英語の事態は、まず、"be+~ing" という迂言形式による表出の可能性の有無により、activity 類 /accomplishment 類のグループと state 類 /achievement 類のグループに分けられる。そして、"be+~ing" による表出が可能な前者は時間の流れの中で継起的に生起する面 (phase) から成る事態であり、当該迂言形式による表出の不可能な後者はそのような面を欠いた事態と見なされている[6]。一方、state 類と achievement 類の違いは、(4a) (4b) が示すように、共起可能な時の副詞句によって示される。つまり、at what time という副詞句と共起する achievement 類は瞬間的な事態であり、for how long という副詞句と共起した state 類は、その長短に違いはあるものの、継続的な事態と見なしているのである[7]。

Vendler (1967) 以後、事態の時間構造に関する研究は大いに発展してきたが、特に、state 類事態の解釈という点から見るとき、Smith (1991) は看過することができない。それは、Vendler (1967) 以後の研究を踏まえた上で、state 類の時間構造を以下のように明瞭に図式化したからである。

(5) state: (I)_____(F) (Smith 1991: 37)

Smith (1991) によれば、(5) の I は事態の開始点、F は終結点を指すが、state 類においてそれらが括弧に入っているのは、同類ではそれらの点がその時間構造の部分とは見なされていないからである[8]。また、Smith (1991) は Vendler (1967) とは違い、事態を state 類, activity 類, semelfactive 類, accomplishment 類, achievement 類の 5 種類に分類したが、開始点および終結点がその時間構造において非関与なのは state 類だけである。言い換えれば、この開始点および終結点の非関与性こそが Smith (1991) の state 類の時間構造を最も特徴づけるものと言える。

一方、Westfall (1995) は Smith (1991) の分類に従いながらも、state 類事態の時間構造については、以下のように、若干異なる図式を提示している。

(6) state: _____ (Westfall 1995: 160)

(6) では、(5) で括弧に入れられていた開始点 I と終結点 F が完全に削除されている。Westfall (1995) がこれら 2 つの端点 (endpoints) を削除したのは、"(a) according to the general (UG) definition, Statives have an arbitrary, rather than natural final endpoint; (b) in the general (UG) temporal shema of Statives, the endpoints of a Stative situation are not part of the state itself; (...)" (Westfall 1995:159) という理由による。つまり、普遍文法の定義にしたがえば、state 類事態の時間構造には恣意的な終結点はあっても固有の終結点はなく、また、普遍文法の state 類事態の時間構造にあっては、開始点と終結点は当該事態の一部ではないと考えているからである。しかし、一方で、state 類事態は (4b) が示すように期間を表す時の副詞句と共起可能である。Westfall (1995) は、そのような例は当該事態が有効であったインターバルを示すものとして、その時間構造に限定性 (boundness) を示す [ ] という記号を付して示し、あくまでも state 類事態の時間構造に開始点と終結点を導入することは避けた。

（7） state: ［_____］ （Westfall 1995: 161）

以上、これまで state 類事態の時間構造がどのように解釈されてきたかを概観したが、それらをまとめると、それは “be+~ing” による表出が不可能な継続的な事態であり、その時間構造には明示的な開始点および終結点が想定されないものということになる。そして、このように解釈された state 類の例として先行研究が共通してあげてきたのが英語の “know”、また、それに対応する各言語の動詞であったのである。このような状況の下、本稿は、この英語の “know” に対応する日本語の「知る」およびスペイン語の “saber” を取り上げ、それらのテンス・アスペクトの振る舞いを比較対照することを通して、語彙アスペクト研究において自明とされてきた state 類の時間構造を再検討していく。

## ３．「知る」と “saber” の位置づけ

本節では、日本語の「知る」とスペイン語の “saber” の時間構造が、まず、それぞれの言語のテンス・アスペクト体系においてどのように位置づけられているのかを見ていく。

### ３．１．日本語の動詞分類における「知る」[9] の位置づけ

まず、日本語の「知る」から見ていこう。日本語の「知る」の時間構造を考える上で看過できないのは、(8) の例が示すように、その「タ形」が「知る」という事態の成立、つまり、その開始を表出するという点である。

（8） 私は昨日それを知っタ[10]。

(8) の「知っタ」は主語となる「私」の「それ」を知らなかった状態から知っている状態への変化の成立を示すものである。また、「知っタ」と共起した「昨日」はその変化が成立した時を示している。このような日本語「知っタ」の振る舞いは、これまで state 類事態に想定されてきた時間構造、すなわち、「state 類事態の時間構造には開始点も終結点も明示されない」という主張に反するものと思われる[11]。

また、日本語の動詞分類の中における「知る」の位置づけを知るには、その「テイル」形の解釈も重要である。よく知られているように、日本語の動詞は、その「テイル」形が「動作進行」を表すか「結果状態」を表すかによって、「継続動詞」対「瞬間動詞」（金田一1950）、「動作動詞」対「変化動詞」（奥田1977）、「主体動作・客体変化動詞」/「主体動作動詞」対「主体変化動詞」（工藤1995）のように区分されてきた。すなわち、その「テイル」形が「動作進行」を表す場合、当該動詞は、「継続動詞」（金田一1950）、「動作動詞」（奥田1977）、「主体動作・客体変化動詞」あるいは「主体動作動詞」（工藤1995）と呼ばれ、「結果状態」を表す場合には、「瞬間動詞」（金田一1950）、「変化動詞」（奥田1977）、「主体変化動詞」（工藤1995）と呼ばれてきたのである[12]。この「テイル」形の意味するところに従うならば、以下のように、「知っテイル」は「知っタ」の「結果状態」を表していることから、金田一（1950）の「瞬間動詞」、奥田（1977）の「変化動詞」、工藤（1995）の「主体変化動詞」に位置づけられることになる。

（9） 私はそれを知っテイル。＜ 私はそれを知っタ。 （＜ は時間的先行を示す。）

一方、日本語の動詞はその「ル」形の意味するところからも分類することが可能である。工藤（1995）によれば、その「ル」形が未来時に言及し、発話時に言及しないものは「外的運動動詞」、人称制限はあるもののその「ル」形が発話時に言及するものは「内的情態動詞」と分類される。この基準に則して「知る」の「ル」形を分析すると、その分類は肯定と否定で異なってくることが分かる。次の例を参照されたい。

（10） a. ?私は近いうちにそれを知ル[13]。
a.' *私は今それを知ル。
b. *私は近いうちにそれを知ラナイ。
b.' 私は今それを知ラナイ。

（10a）は「知ル」の肯定が未来時に言及可能なことを、また、（10a'）は「知ル」の肯定が発話時に言及できないことを示したものである。これらの例に従うならば、「知る」は工藤（1995）の「外的運動動詞」に相当することになる。一方、「知ル」の否定は（10b）が示すように未来時には言及できず、（10b'）が示すように発話時に言及する。この観点からすると、「知る」は工藤（1995）の「内的情態動詞」ということになる。このうち、工藤（1995）の「外的運動動詞」という分類には先に見た工藤（1995）の「主体変化動詞」が含まれるので、「テイル」形の解釈による「知る」の位置づけと肯定の「ル」形の解釈による「知る」の位置づけの間には分類上の齟齬はないが、「テイル」形の解釈による「知る」の位置づけと否定の「ル」形の解釈による「知る」の位置づけの間には、「外的運動動詞」と「内的情態動詞」という乖離が見られることになる[14]。

### ３．２．スペイン語の事態分類における “saber” の位置づけ

次に、スペイン語の “saber” を見る。まず、（11）が示すように、“saber” の ps. による表出は当該事態の成立を示し、それと共起した時の副詞句は成立時を示す。これは先に見た日本語の「知っタ」と同様、従来 state 類事態に付与されてきた時間構造に反するものである。

（11） Yo lo supe（ps.）ayer. 私は昨日それを知った[15]。

また、“saber” の時間構造を考えるにあたっては、Morimoto（1998）で提示された基準が参考になる。それによれば、“saber” は以下のように位置づけられることになる。

（12） Yo lo sabía（imp.）. ←Yo lo supe（ps.）.
私はそれを知っていた 私はそれを知った

（12）の例における←は imp. の意味内容が ps. の意味内容を含意していることを表す。つまり、“saber” の imp. による表出の意味するところはその ps. による表出の意味内容を含意するということである。Morimoto（1998: 19）によれば、当該事態の ps. と imp. の間に上記のような意味関係が成立するとき、その事態は predicado no-delimitado（非限界的事態）[16] と見なされることになるので、“saber” は非限界的事態ということになる。一方、Morimoto（1998: 18）によれば、以下のように、スペイン語の事態は共起する時の副詞句の種類という観点からも分類可能である。

（13） Yo lo supe（ps.）?? durante/en cinco minutos.
私はそれを ?? 5 分間 / 5 分で知った。

Morimoto（ibid.）によれば、*durante cinco minutos*（5 分間）のような期間を表す副詞句と共起可能な事態は no-delimitado、一方、*en cinco minutos*（5 分で）のように当該事態が成立するまでに要した時間を表す副詞句と共起する事態は predicado delimitado（限界的事態）と指摘されている。この基準に従うならば、“saber” は限界的事態ということになる。さらに、Morimoto（1998: 20）では、当該事態が estado（状態）か no-estado（非状態）かを判断する材料として、進行を表す迂言形式 “estar+gerundio” による表出の可能性、命令形の可能性、cuidosamente（注意深く）という副詞との共起の可能性が提示されているが、これらを “saber” に応用した結果は次のようになる。

（14） *Juan está sabiendo la verdad.（Morimoto 1998: 20）
フアンは真実を知りつつある[17]。

（15） Sepa usted que esto es muy duro, (...)（CREA[18], La gaznápira）
これはとても辛いということを知ってください[19]。

（16） *Juan sabe español cuidadosamente.（Morimoto 1998: 20）
フアンは注意深くスペイン語を知っている。

（14）は “saber” が進行を表す迂言形式 “estar+gerundio” を容認しないことを示しているが、Morimoto（1998）に従えば、これは “saber” が状態の事態であるということになる。また、（15）は “saber” が命令形になることを示しているが、これは “saber” が非状態の事態であることを示すものである。一方、（16）の “saber” が *cuidadosamente*（注意深く）と共起できないという事実はそれが状態の事態であることを示したものである。

以上、スペイン語における “saber” の位置づけを見たが、その結果は一義的にまとめることができない。それは、ps. の意味するところと imp. の意味するところの関係からは非限界的事態となるが、共起する時の副詞句の種類という観点からは、逆に、限界的事態と判断されることになり、また、“estar+gerundio” という迂言形式による表出の可能性、*cuidadosamente* という副詞句との共起の可能性からは状態的事態となるが、命令形の可能性という観点からは非状態の事態と判断されるというように、各判断基準に従った結果が互いに相反するものとなるからである。

### 3.3. まとめ

以上の日本語「知る」とスペイン語 “saber” の位置づけをまとめると、次のようになる。

（17） 日本語「知る」：
① 「タ」形は「知る」の成立（開始）を表す。
② 「テイル」形の解釈からは、金田一（1950）の「瞬間動詞」、奥田（1977）の「変化動詞」、工藤（1995）の「主体変化動詞」に分類される。
③ 「ル」形肯定の解釈からは工藤（1995）の「外的運動動詞」、「ル」形否定からは工藤（1995）の「内的情態動詞」に分類される。

スペイン語 “saber”:
① ps. は “saber” の成立（開始）を表す。
② imp. と ps. の関係からは非限界的事態と分類される。
③ 共起する時の副詞句からは限界的事態と分類される。
④ “estar+gerundio” による表出が不可能なこと、*cuidosamente*（注意深く）と共起できないことからは状態事態と分類される。
⑤ 命令形が可能なことからは非状態事態と分類される。

これらのうち、まず、英語の “know” の振る舞いと異なるものとして指摘しなければならないのは、「知る」の完結相、“saber” の ps. のいずれもが当該事態の成立（開始）を表すという点である[20]。この特徴は従来 state 類事態に付与されてきた時間構造とは相容れないものだからである。また、日本語の動詞分類の中での「知る」の位置づけ、スペイン語の事態分類における “saber” の位置づけのどちらも一律には決まらないこと、さらに、「知る」、“saber” のどちらも、分類の判断基準が異なるとその位置づけが相反するものになるという点も看過することのできない英語の “know” との違いである。

## 4.「知る」と “saber” に見られる共通の現象

次に、英語の “know” の時間構造を扱う際には特に指摘されることはないが、日本語の「知る」とスペイン語の “saber” のテンス・アスペクトの振る舞いを考える上では見過ごすことができないと思われる共通の現象について見ていく。

### 4.1. 直接目的語の種類とテンス・アスペクトの関係

これまで本稿の例文の「知る」および “saber” の直接目的語は単に「それ」としてきたが、それには理由がある。それは、直接目的語の種類が「知る」、“saber” の文法性に大いに関与するということである。例えば、「知る」、“saber” の直接目的語として、その伝達が容易で、その情報獲得も瞬時に行われる「彼のアドレス」、その伝達・情報獲得に少々時間がかかる「真相」、その伝達が困難で、いつその情報獲得が完了したかの判断もつきにくい「日本語」の 3 つを取り上げ[21]、そのそれぞれと「知る」、“saber” の各テンス・アスペクト形式の親和性を調べてみると、以下のようになる。

(18) a. そのとき私は彼のアドレスを / 真相を / *日本語を知ル。
a'. そのとき私は彼のアドレスを / 真相を / *日本語を知っタ。
b. 私は彼のアドレスを / 真相を / 日本語を知っテイル。
b'. 私は彼のアドレスを / 真相を / 日本語を知っテイタ。

(19) a. Entonces sabré (fut.) su dirección/la verdad/*japonés.
そのとき私は彼のアドレスを / 真相を / *日本語を知る。
a'. Entonces supe (ps.) su dirección/la verdad/*japonés.
そのとき私は彼のアドレスを / 真相を / *日本語を知った。
b. Sé (pres.) su dirección/la verdad/japonés.
私は彼のアドレスを / 真相を / 日本語を知っている。

b'. Sabía (imp.) su dirección/la verdad/japonés.
私は彼のアドレスを / 真相を / 日本語を知っていた。

(18a) (18a') からは、「知る」の完結相が直接目的語「日本語」とは親和性のないこと、また、(19a) (19a') からは、"saber" の ps. も直接目的語 *japonés* とは親和性のないことが分かる。一方、(18b) (18b') (19b) (19b') からは、「知る」の継続相、また、"saber" の pres、imp. はいずれの直接目的語とも親和性があるのが分かる。ここで、日本語の「知る」の完結相とスペイン語の "saber" の ps. による表出が直接目的語の内容を「知らない」状態から「知っている」状態への変化を表すと考えるならば、そのいずれもが直接目的語「日本語」と相容れないということは何を意味することになるのだろうか。今のところ本稿はこの問いに対して明確に答えることはできないが、それには先述した「日本語」という語が持つ情報としての特異性、すなわち、その情報獲得の完了が曖昧であること、また、その内容を伝達することが極めて難しいということが関係しているのではないかと考える[22]。

### 4.2. 主語「私」とテンス・アスペクトの関係：直接目的語が名詞節の場合

また、「知る」、"saber" の直接目的語が「太郎が結婚すること」のように名詞節の場合には、主文の指示対象が誰かということがその文法性に関わってくる。以下の例を見られたい。

(20) a. *近いうちにきっと私は太郎が結婚することを知ル。
a'. 近いうちにきっと花子は太郎が結婚することを知ル。
b. *私は太郎が結婚することを知ラナイ。
b'. 花子は太郎が結婚することを知ラナイ。
c. 私は太郎が結婚することを知っタ。
c'. 花子は太郎が結婚することを知っタ。
d. 私は太郎が結婚することを知ラナカッタ。
d'. 花子は太郎が結婚することを知ラナカッタ。

(20a) (20b) は、主文の主語が発話者を指す「私」のとき、「知る」の「ル」形は非文になることを示している。また、(20a') (20b') は、主文の主語が「私」以外のときには、「知る」の「ル」形は文法的になることを示している。一方、(20c) (20c') (20d) (20d') は、「知る」の「タ」形は主語の指示対象が誰であれ文法的になることを示している。このように主語が「私」、すなわち主文の主語と発話者が一致するときの制約は、スペイン語の "saber" にも起こる。以下の例を参照されたい。

(21) a. *No sé (pres.) que Taro va a casarse.
私は太郎が結婚するつもりであることを知らない。
a'. No sabía (imp.)/*supe (pres.) que Taro iba a casarse.
私は太郎が結婚するつもりであることを知らなかった (imp.)/ 知ることはなかった (ps.)。
a''. No supe (ps.) hasta entonces que Taro iba a casarse.
私はそのときまで太郎が結婚するつもりであることを知ることはなかった。(→そのとき太郎が結婚するつもりであることを知った。)
b. Hanako no sabe (pres.) que Taro va a casarse.

花子は太郎が結婚するつもりであることを知らない。

b'. Hanako no sabía (imp.)/supo (ps.) que Taro iba a casarse.
花子は太郎が結婚するつもりであることを知らなかった (imp.)/ 知ることはなかった (ps.)

c. *Un día de estos, seguro que sabré (fut.) que Taro va a casarse.
近いうちにきっと私は太郎が結婚するつもりであることを知る。

c'. Un día de estos, seguro que Hanako sabrá (fut.) que Taro va a casarse.
近いうちにきっと花子は太郎が結婚するつもりであることを知る。

d. Supe (ps.) que Taro iba a casarse.
私は太郎が結婚するつもりであることを知った。

d'. Hanako supo (ps.) que Taro iba a casarse.
花子は太郎が結婚するつもりであることを知った。

(21a) から、主文の主語が発話者と同一の「私」のとき、"saber" の pres. の否定は非文になることが分かる。また、(21a') からは、同じく主文の主語が「私」のとき、"saber" の ps. の否定も非文になることが分かる。しかし、それと同じ環境でも "saber" の imp. は非文にならないことに注目されたい。さらに、(21c) からは、主文の主語が「私」のとき、"saber" の fut. も非文になることが分かる[23]。しかし、これらの文以外は非文になっていないことから、主文の主語が「私」でない場合の "saber que..." にはテンス・アスペクトの制約がないと言える。

以上をまとめるならば、まず、主文の主語が「私」のとき、日本語の「知る」とスペイン語の "saber" の発話時に言及する形式の否定は非文になるということであるが、これは当該文の意味的・論理的制約に因るものと考えられる。すなわち、従属文において「知る」、"saber" の対象となる情報が提示されているにも拘らず、その情報を発信している発話者自身がその情報を「知らない」ということは論理的矛盾になるのである。同じく、未来時に言及する「知る」と "saber" の直接目的語として従属文が出現する場合も非文になりやすいのも、それが論理的矛盾を引き起こすからであろう。従属文においてすでに明らかにされている情報をその発信者である発話者自身が発話時以降に新たに入手するということは理解し難いからである

一方、主文の主語が「私」のとき、スペイン語の "saber" の ps. の否定が非文になるというのは専らスペイン語の ps. の機能に因るものである。先にも見たように、"saber" の ps. が「知らない」状態から「知っている」状態への変化を表すと考えるならば、que 以下の従属文において "saber" の対象となる情報が提示されているにも拘らず、*no supe* によってその情報の獲得を発話者が否定するというのは論理的矛盾である。それが (21a') の pres. の非文に繋がったと思われる。実際、CREA で *no supe que* を検索すると、その多くは (21a") のように解釈上は従属文が表す情報を話者が入手したことを表すものであった。このことからも、*no supe que...* が非文になるのは、"saber" の主語が発話者と同一人物であるということと ps. の機能の複合的理由に因ると考えられる[24]。

(以下、次号に続く)

## 注

* 本稿は2014年 9 月 2 日、静岡県ヤマハリゾートつま恋で開催された日本スペイン語学セミナー (SELE2014) において「日本語「知る」とスペイン語 "saber" の比較対照 ── 語彙的アスペクト・文法的アスペクト・テンスの観点から ──」という題目で発表したものに修正・加筆した

ものである。発表時、貴重なご意見、ご批判を下さった方々に深く感謝の意を表したい。ただし、本稿中の誤りおよび不備な点はすべて筆者の責任である。なお、紙幅の関係で本号に掲載するのは本稿の前半部分、すなわち、1．はじめに、2．先行研究における state 類事態の解釈、3．「知る」と “saber” の位置づけ、4．「知る」と “saber” に共通に見られる現象、までである。残りの 5．「知る」、“saber” に特有の振る舞い：テンス・アスペクトに注目して、6．結論に代えて、は「「state 類事態の時間構造」再考 ── 英語 “know”, 日本語「知る」, スペイン語 “saber” の対照研究 ──（下）」として『言語文化論究』No.35へ掲載する予定である。

1 本稿は動詞からなる命題すべてを表すカバータームとして「事態」を用いる。

2 Cf. Smith（1991), xvi-xvii.

3 最近の研究の中には、スペイン語の “tener” の ps. が英語の “get” の過去形に対応するのは、スペイン語 “tener” において語彙アスペクトの shift あるいは coercion（スペイン語では coerción, coacción）が起こっているからだと主張するものがある。そのような主張を支持する研究者のひとりである Westfall（1995: 168-170）は、“saber” は基本的には state 類事態であるが ps. によって表出されると英語の “to find out/learn” に相当する inceptive Achievement に shift すると述べている。しかし、本稿はそのような立場を取らない。山村（1998: 143-144）が指摘するように、いわゆる coercion は、ある動詞が特定の目的語（補語）を伴い特定の時制によって表出された場合にのみ得られる解釈に過ぎず、当該言語のテンス・アスペクト体系における当該時制の機能という観点からの考察を欠いたものと考えるからである。

4 周知のとおり、スペイン語には英語の “know” に対応する動詞として “saber” のほかに “conocer” があるが、本稿では “saber” しか扱わない。英語の “know” と日本語の「知る」のようにその直接目的語として何らかの情報を示す名詞を取るのは普通 “saber” だからである。

5 Vendler（1967）の中では time shemata という用語が用いられている。

6 Vendler (1967) 以後の研究においては、“be+~ing” による表出の可能性の有無は当該事態の「動性（dinamismo)」の有無と結びつけられることが多い。

7 Vendler（1967）のあげた例文の文法判断については疑問が持たれるかもしれない。例えば、google で *I am loving, I am reaching the top* という文を検索すればかなりのヒット数が得られるからである。しかし、Vendler (1967) がこれらの文を非文としたのはあくまで What are you doing? という疑問文に対する答えとしてであった。また、Vendler（1967）が achievement 類に属する事態を “be+~ing” と相容れないとした判断にも、これまでに多くの疑義が呈されてきたが、Vendler（1967）がそのように判断した理由については、次の引用文が参考になるだろう。“Even if one says that it took him three hours to reach the summit, one does not mean that the “reaching” of the summit went on during those hours. Obviously it took three hours of climbing to reach the top. Put in another way: if I write a letter in an hour, then I can say “I am writing a letter” at any time during that hour, but if it takes three hours to reach the top, I cannot say “I am reaching the top” at any moment of that period. ”（Vendler 1967: 104）

8 Cf. Smith (1991), p.37. しかし、それにも拘わらず、Smith（1991）が state 類事態の時間構造に I と F の記号を残しているのは、Westfall（1995: 159）によれば、Smith（1991）がフランス語の state 類事態の完了アスペクトによる表出はその開始点と終結点を表示すると見なしていることに因るらしい。

9 日本語の動詞の辞書形は「知る」のように記す。一方、その「ル形」が非過去・完了相のようにテンス・アスペクトの意味を表す際には、「知ル」のように、関連部分をカタカナで記す。

10 後述するように、「知る」、“saber” の振る舞いには、主語の性質（話し手と同一か否か）、直接目的語を示す「ヲ格」の性質が関係してくる。そのような諸要因については後述するため、ここでは主語は話し手の「私」、また、直接目的語は「それ」とした。

11 Smith（1999: 480, 注２）は、“The initial and final endpoints of a state are changes which map to times; there is no such mapping for the interval over which the state holds.” と述べている。この記述からすると、Smith は state 類事態の当該状態への変化はその開始点、また、当該状態からの変化はその終結点と認めながらも、それらは当該状態の時間構造には組み込まれないと考えているように見える。

12 本文中の「テイル」形の意味解釈に従った日本語動詞の分類はいささか大雑把である。周知のように、主体の動作と客体の変化が統一的に把握される他動詞においては、その「テイル」形の解釈が能動形と受動形で異なることがあるからである。実際、工藤（1995）における「主体動作・客体変化動詞」と「主体動作動詞」の違いは、そのような能動形と受動形の「テイル」形に見られる解釈の違いに基づいたものと言える。すなわち、他動詞である「主体動作・客体変化動詞」では、能動形の「テイル」形は「動作進行」、受動形の「テイル」形は「結果継続」というように「テイル」形の解釈が能動・受動で異なるのに対し、自動詞と他動詞の両方がある「主体動作動詞」においては、その自他、また、その能動・受動に拘らず「テイル」形はすべて「動作進行」と解釈されるのである。

13 未来時に言及する「知ル」の肯定には「ダロウ」のようなモダリティ形式が後接するのが一般的である。

14 工藤（1995）は、「ル」形対「テイル」形のアスペクト対立がある動詞群を「外的運動動詞」、また、「ル」形対「テイル」形のアスペクト対立がない動詞群を「静態動詞」と呼んでいる。一方、工藤（1995）が「内的情態動詞」と呼ぶのは、「思う、驚く、感じる、疲れる」のような思考・感情・知覚・感覚を表す動詞群のことで、これらは英語のような言語では基本的に進行形にはならない。また、「内的情態動詞」には「思ウ」対「思っテイル」のように「ル」形と「テイル」形の分化は見られるが、工藤（1995）によれば、それは人称制限を受ける点で「外的運動動詞」に見られるアスペクト対立とは異なるという。Cf. 工藤（1995), pp.44-45.

15 以下、スペイン語の例については、引用文の場合はその出典を括弧に入れて示す。括弧がない場合は筆者の作例である。また、問題となる “saber” の形式は下線でそれを示す。なお、ps. は pretérito perfecto simple（点過去）、imp. は pretérito imperfect（線過去）、pres. は presente（現在）、fut. は futuro（未来）の略語である。

16 Morimoto（1998）では本稿の「事態」に相当する用語として predicado が用いられている。

17 Morimoto（1998: 20）は（14）のスペイン語文に非文を示すアステリスクをつけているが、同時に、“（…）en el caso de que acepten este tipo de construcción, recibirán necesariamente una interpretación ingresiva. このタイプの構造を受け入れる場合は、必然的に起動的解釈を受ける” と付け加えてもいる。この指摘は当該例文に対応する日本語「フアンは真実を知リツツアル」の解釈にも通じるもので興味深い。この点については本稿の後半「５.「知る」、“saber” に特有の振る舞い：テンス・アスペクトに注目して」で詳述する。

18 CREA とは Real Academia Española が online で提供しているスペイン語のデータベースのことである。詳しくは http://www.rae.es/recursos/banco-de-datos/crea を参照されたい。

19 （15）のスペイン語文に対応する日本語文「これはとても辛いということを知ってください」というのは、日本語としてはやや不自然である。より自然な日本語にするならば「知ってくださ

い」は「分かってください」になるであろう。

20 注 3 で指摘したように、Westfall（1995: 169-170）は、このように ps. で表出され当該事態の「成立（開始）」を示す “saber” では state 類から inceptive Achievement への語彙アスペクトの shift が起こっていると解釈している。しかし、注 3 でも述べたように、本稿はそのような解釈は取らない。

21 「情報獲得が瞬時に行われる」とは、例えば、「彼のアドレス」はそれを知っている人に尋ね、教えてもらえば瞬時に獲得できることを示す。同様に、「いつその情報獲得が完了したのかの判断がつきにくい」というのは、「日本語」をどれだけ学習すれば、あるいは、「日本語」にどれだけ習熟すれば、それを完全に獲得したことになるのかの判断がつきにくいことを指す。一方、「伝達の容易さ」とは、情報を人に伝える際の容易さを指す。例えば、「彼のアドレス」は口に出して、あるいは、何かに書いて簡単に伝えることができるが、「日本語」が何であるかという情報を伝達することは極めて難しい。

22 例えば、google の詳細検索で、「英語を知りました」を検索すると数十のヒットがある。しかし、その「英語」は「二つの英語を知りました」、「新しい英語を知りました」のように、具体的な英語の単語を指す場合がほとんどである。つまり、そこで使われている「英語」は「彼のアドレス」と同じく瞬時に入手可能で伝達が容易な情報という意味で使われているのである。一方、スペイン語の “saber” の ps. による表出 *supe japonés*（私は日本語を知った）の “japonés”（日本語）が具体的な日本語の単語を指すことはない。

23 しかし、これは *sabré que...* が必ず非文になることを意味しない。実際、CREA を検索してみると、*sabré que...* の文はヒットする。（CREA の España を対象とした検索では16例がヒットした。）しかし、それらの文は、¿Cómo sabré que...? のように反語的に “saber que...” の成立を否定するものであったり、次の例が示すように、「私は…が分かることになる、私は…を理解することになる」といった意味を表すものが多い。Cuando me sonrías, sabré（fut）que ya me entiendes.（CREA, Naufragios de Álvar Núñez o La herida del otro）あなたが私に微笑んでくれれば、私はもうあなたが私のことを理解しているってことが分かる。

24 同じ主文の主語が「私」にも拘らず、非文にはならない “saber” の imp. による表出については後述する。

## 参 考 文 献


Butt, J. & Benjamin, C.（1994[2]）: *A New reference Grammar of Modern Spanish*, London: Edward Arnold

Gómez Torrego, L.（1988）: *Perífrasis verbales*, Madrid: Arco/Libros, S.A.

Morimoto, Y.（1998）: *El aspecto léxico: delimitación*, Madrid: Arco/Libros, S.A.

Smith, C.（1991）: *The Parameter of Aspect*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

———（1999）: “Activities : States or Events ?”, *Linguistics & Philosophy* 22, 279-508.

Vendler, Z.（1967）: “Verbs and Times”, *Linguistics in Philosophy*, 97-121.

Westfall, R.E.（1995）: *Simple and Progressive Forms of the Spanish Past Tense System: A Semantic and Pragramtic Study in Viewpoint Contrast*, UMI Dissertation Services.

大浦　真（2002）:「瞬間動詞「知る」の振舞」『京都大学言語学研究』21, 187-216.

奥田靖雄（1977）:「アスペクトの研究をめぐって ── 金田一的段階 ──」『国語国文』8（宮城教育大学）

金田一春彦（1950）：「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 48-63.
工藤真由美（1995）：『アスペクト・テンス体系とテクスト ── 現代日本語の時間表現 ── 』ひつじ書房 .
久野　暲・増永喜代子（1983）：「「知ラナイ」と「知ッテイナイ」『新日本文法研究』大修館書店, 109-116.
定延利之（2006）：「心内情報の帰属と管理 ── 現代日本語共通語「ている」のエビデンシャルな性質について」中川正之・定延利之（編）『言語に現れる「世間」と「世界」』くろしお出版, 167-192.
山村ひろみ（1998）：「Smith（1991）のアスペクト理論とスペイン語の pretérito」『独仏文学研究』第48号, 135-150.
────（1999）：「スペイン語の imperfecto と時間的限定性」『言語文化論究』No.10, 11-32.
────（2000）：「estar+gerundio の記述と考察（下）」『独仏文学研究』第50号, 7-28.

## 資　料　体

Real Academia Española: Banco de datos（CREA）[en línea]: Corpus de referencia del español actual http://www.rae.es [de julio a noviembre de 2014]

# Reconsideración sobre la estructura temporal de los predicados estativos

## —— estudio contrastivo del verbo inglés “know”, el verbo japonés “shiru” y el verbo español “saber” —— (Primera parte)

Hiromi YAMAMURA

Este trabajo tiene por objetivo comprobar la validez de la estructura temporal de los predicados estativos afirmada en la mayoría de los estudios sobre el aspecto léxico a través de la investigación de los comportamientos tempo-aspectuales del verbo japonés “shiru” y el verbo español “saber” correspondientes al verbo inglés “know”. El resultado se resume como sigue:

- El verbo japonés “shiru” y el verbo español “saber” comparten las particularidades siguientes:

1. Tanto la forma verbal -TA del verbo japonés “shiru”, a la que se asigna generalmente el aspecto «concluso» en la lingüística japonesa, como el pretérito pertecto simple del verbo español “saber” denotan el surgimiento del cambio de “no-saber” al “sí saber”. Esto sugiere que no es imposible poner el punto inicial en la estructura temporal de los predicados estativos que hasta ahora se afirmaba que temporalmente no poseen ni punto inicial ni final.
2. Ni la forma verbal -RU del verbo japonés “shiru”, a la que en la lingüística del japonés se asigna generalmente el tiempo «no-pasado», ni el presente del verbo español “saber” se refieren al futuro, en contra de lo que sucede con la mayoría de los verbos de dichas dos lenguas. De esto se deduce que tanto al verbo japonés “shiru” como al verbo español “saber” les falta la agentividad.
3. Tanto en el verbo japonés “shiru” como en el vebo español “saber”, el sujeto de la primera persona y los significados del complemento directo afectan mucho sus comportamientos tempo-aspectuales.

(Continuará en el próximo número)